

てくてくあきる野 むかし発見！

第15話 「西秋留の湧き水を訪ねて」



白滝神社の湧き水

今回は秋川駅から西秋留地区の湧き水を訪ねましょう。駅の南口を西へ進み、高架の道に沿って南へ。4百メートルほどで広い都道に出るのでこれを渡り、都道に沿って西へ進むとやがて歩道橋があります。その階段の脇を南へ降りると、白滝神社の社殿が見えます。白滝神社はかつて不動明王を合祀していたため不動堂と呼ばれ、明治の神仏分離により白滝神社と改称されました。本殿の壁面には中国の故事にまつわる彫刻が飾られています。題材は漢の武帝に仕えた功臣の逸話で統一されていて、見事な技は一見の価値があります。境内は秋留台地の段丘崖にあり、社殿の脇からはきれいな地下水がこんこんと湧き出し、神社の名前の通り小さな滝が水しびきをたてて心地よい水音を響かせています。手を浸すと冷たさがとても心地よく感じます。滝の脇には剣を今にも飲込もうとする龍の姿をした不

動明王の石像が建ち、神仏混交の名残を留めています。清らかな湧き水を守るようにいかめしい形相でにらむ姿は、薄暗い木立の中で一種独特の雰囲気を感じさせています。



真城寺の湧き水

湧き水の流れに沿って、南へ坂を下りましょう。この坂は滝坂と呼ばれています。右手には旧家の大きな屋敷や蔵が並び、この地域の歴史を感じさせます。少し行くと三叉路にあたるので、右へ。やがて右奥に真城寺が見えてきます。真城寺は臨済宗建長寺派で、足利尊氏の子である基氏が三三一年に創立したと伝えられる古刹です。鐘楼の前には市指定天然記念物のシダレザクラがあります。古木のため、幹の上部を失っていますが、かつては現在の倍以上の高さがありました。現在も春になると大きく広げた枝に美しい花を咲かせ、古木ならではの非常に品のあ

内はともきれいに手入れされています。植物など傷めないように充分注意してください。

先ほどの道に戻り、更に西へ進みましょう。広い道にでたら左へ折れると、すぐに千代里会館があります。建物の南側に小さな社があります。これは神明社です。16世紀終わり頃に秋川対岸の二城山に居住していた大石遠江守道俊が、この地に移したと伝えられています。この社殿にも壁面に見事な板の彫刻が飾られています。七福神の一人である寿老人や、天の岩戸などを題材にしています。白滝神社が中国の故事をテーマとしているのに対して、ここでは三面のうち二面が女性を主とした日本の神話、一面が中国の仙人を題材としています。それぞれの宮大工や注文主の知的趣向とその違いをうかがうことができる興味深い資料です。板という厚さの限られた空間の中に、奥行きのあるダイナミックな世界が表現されています。

道に戻りましょう。来た道に戻って坂を登ります。この坂の登り口の西側には、その昔、東海寺という大悲願寺末の寺がありました。この坂は坊内坂といえます。ポウネイザカ、ポウザカとも呼ばれます。この名が付けられた理由は、真城寺と東海寺と、坂の上にある観音寺の三寺の僧侶がこの坂を通つたためといわれています。では、その観音寺へ向かいましょう。坂の途中を左に曲がり、道なりに進みます。やがて観音寺が見えてきます。本尊は聖観世音菩薩です。足利基氏創建と伝えられますが古記録の焼失により詳しいことはわ

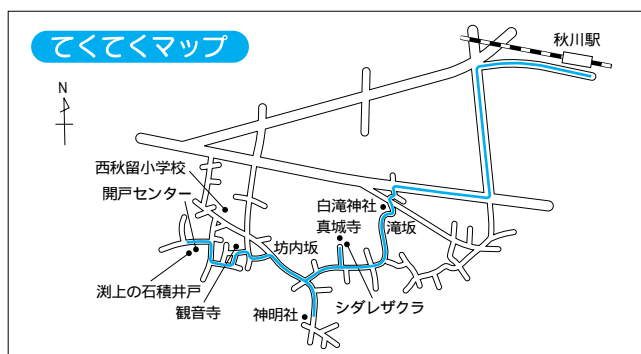
かりません。明治時代には西秋留村の村役場として利用されたこともありました。境内に建つ薬師堂は、かつては睦橋通り付近にあったそうです。

観音寺から西へ進むと、やや広い道になるので、そのまま行くのではなく開戸センターがあります。駐車場のアスファルトのレンガ色の部分をたどって行くと、建物の西側に市指定史跡「測上の石積井戸」があります。

この井戸は直径が最大で7.5メートルあり、すり鉢のようなかたちをしています。螺旋状の通路が巡って、それをたどって水面まで降りる構造になっていますが、見字は柵の外からお願いします。壁面は石垣で覆われていて、自然石を用いた野面積みになっています。また自然石に混じって、破損した伊奈石製の石臼も数点使用されています。平成4年の発掘調査によつて、深さが3.2メートルであることが判りました。また底は非常に固く締まった地層で、この層の上を移動する地下水が石垣の最下部から盛んに湧き出していました。この井戸が掘られた時代を直接証明する資料は見つかっていません。ただ、井戸を新たに掘る際は安定した水量を得るために既に



測上の石積井戸



ここで、皆さんにお願いです。開戸センターは高齢者を対象とした各種の事業を行っている施設です。このため、建物の中への立入りなど、センターの方々の仕事の妨げや迷惑になるような行為は避け、見字は静かにそつとお願いいたします。

文化財を見学する際は、マナーを大切にしましょう。